

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：31307

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04638

研究課題名（和文）「深い学び」を生成する保育カリキュラムの研究 自然発生的遊びに着目して

研究課題名（英文）A Study of Childcare Curriculum to Generate "Authentic Learning": Focusing on Spontaneous Play

研究代表者

西城 裕子（磯部裕子）（Saijo, Hiroko）

宮城学院女子大学・教育学部・教授

研究者番号：50289740

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、実践記録をもとに、保育空間とカリキュラムの連関、環境がアフォードする実践の具体の検証、環境や空間の変化と子どもの遊び、探究のプロセスから、「深い学び」を生み出す要素の検証を進めてきた。教授的な遊びは、「遊び」の形式をとっていたとしても、保育者の計画した到達段階に達することが目的とされがちで、そのプロセスに子どもが実感する「学び」が生成しづらい。「自然発生的な遊び」は、系統的でないことから、保育者が事前に計画することに困難が伴うが、子どもの興味の深まりから派生する遊びの見通しを持ち、教材の可能性を探ることで、子どもの学びを深化させていくことが可能となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多くの保育の現場が、形式的なカリキュラムの編成の問題を自覚しつつも、子どもの遊びに即したカリキュラムを編成することの困難に直面している。本研究では、主体的な遊びを基本としたカリキュラムに転換するうえで、それを可能とする要素として、子どもの興味の読み取り、環境、教材研究の可能性について、明らかにした。研究の中で整理された事例を通してこれからのカリキュラム編成の方向性を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：Based on practice records, this study has been examining the linkage between the childcare space and curriculum, examining the specifics of the practices that the environment affords, and examining the elements that generate "authentic learning" from the process of change in the environment and space and children's play and exploration. Even if teaching play takes the form of "play," it tends to be aimed at reaching the attainment stage planned by the nursery teacher, and it is difficult to generate "authentic learning" that the child realizes in this process. "Spontaneous play" is difficult for nursery teacher to plan in advance because it is not systematic, but it is possible to by having a perspective of play derived from children's deepening interest and by exploring the possibilities of teaching materials.

研究分野：幼児教育学

キーワード：深い学び 保育カリキュラム 自然発生的遊び 計画・評価

## 1. 研究開始当初の背景

わが国の保育政策は、この10数年の間、待機児童を解消することが優先課題とされ、量的拡充が進められてきた。そもそもわが国の保育は、民間立の保育施設が保育需要に応じてきた歴史があり、このことから実践が多様化する傾向にある。もちろん、このことがこれまでも多くの先駆的な実践を生むことの要因にもなっては来たが、「多様化」が十分な質を担保できない状況にあったことも否定できない。

平成30年の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育保育要領が改訂され、保育の本質、すなわち「遊びを中心とした保育実践」への検証がさらに進められた。その後の学習指導要領の改訂とも連動し、幼児教育において育みたい「資質や能力」における3つの柱「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力などの基礎」「学びに向かう力、人間性など」が示された。これにより、幼児教育における「遊び」が単なる<遊び>ではなく、「学び」を生成する体験であることが確認され、小学校以上の教育の土台であるとして、新たな実践の展開が期待された。

しかしながら、「学び」を生成する「遊び」とは何なのか。「学び」が学習ではなく、「主体的・対話的で深い学び」であるとは何かについては、その具体的検証が十分になされず、今日に至っている。

その背景にあるのが、実践の場における「カリキュラム観」である。自由な「遊び」は、子ども主体の営為であるが、いわゆるカリキュラム(保育計画を含む)は、保育者が事前に計画する。この主体のずれが、「遊び」という営為に矛盾を生む。したがって、「主体的・対話的で深い学び」を生成する「遊び」を展開するには、「カリキュラム」あるいは「カリキュラム観」そのものの検証が必要ともいえるだろう。これまでの「カリキュラム」のあり様を検証し、「学び」を生成する「遊び」とは何なのかという分析は、わが国の保育の質の向上にアプローチする手立てとなるのではないか。こうした仮説と課題が本研究に至る背景である。

## 2. 研究の目的

保育は、教科学習の準備教育ではなく、「学ぶ」という営為の本質的体験の実践でもあることから、保育の質的向上を目指すとは、幼児の学びの質をどのように高めていくかという課題とイコールである。本研究は、保育の質的向上を促すためには、「学びを生成する遊び」が重要であるという仮説をもとに、意味ある「遊び」の構築について検討する。「遊び」が重要な営為であることは、保育においては自明のことであるが、意味ある「遊び」とは、教授的伝達の遊びではなく子ども主体の遊びに他ならない。そこで本研究では、子ども主体の遊びが「自然発生的な遊び(体験)」から生成するのではないかというもう一つの仮説を立て、この遊びに着目して、「自然発生的な遊び」の「学び」に着目し、そのうえで、この遊びのカリキュラム構成の可能性を探ることを目的とする。教育実践のカリキュラムは、基本的に教師が事前に立案する。保育においても、そうしたカリキュラムと実践の関係が構築されてきたが、近年このカリキュラムのあり様が見直されつつある。主体的な遊びによって実践が構築される保育においては、保育者が事前に立案し、その計画に従って実践するというカリキュラム観の下では、矛盾が生まれる。こうしたカリキュラムと実践の関係を見直し、新たなカリキュラムのあり様を提示することが本研究の目的の一つである。

本研究を進めるにあたって、実践の検証の場として、研究園Aを設定する。この研究園は、2023年春に公立保育所の園舎を解体し、新園舎を建設し、新たな環境でこども園としてスタートする。この園の実践開始に合わせ、この園の建設に関わる建築家、保育者、研究者の3者で協同し、園の環境と保育内容の連関の検証を進める。本研究のフィールドとしての研究園Aに関わる専門家の協同した実践構築のプロジェクトは、この議論を積み上げていくそのプロセスそのものもまた研究対象とし、実践を記録し語るナラティブのあり様、またここで協同する広い意味での実践者の「学びの体験」の検証についても明らかにしたい。

質的研究である本研究において、建築の専門家、保育の実践者、保育研究者と共に重ねてきたワークショップ形式のフィールドワークから、保育という実践の質を検証する方法論の可能性を探ることも、本研究の目的の一つでもある。

## 3. 研究の方法

本研究は、研究目的を明らかにするために、実践の具体を以下の方法で分析を進める。

### 【第1段階 データの収集と分析】

実践者の語り(インタビュー、カンファレンス等)、およびエピソード記録を研究者が文字記録として整理し、実践者と研究者が協同でその意味を読み解く。

実践の環境、実践そのものを映像に記録し、実践者と研究者で検証し、環境と実践の連関を明らかにする。

#### 【第2段階 環境(園舎を含む)と実践内容の分析】

建築家から提案される設計図から環境をイメージし、実践との連関を検証する。検証を進めるにあたっては、建築家と実践者と研究者の議論の記録を整理し、この場に生成する「学びあう体験」の意味を明らかにする。

研究代表者の理論研究成果を再分析したうえで、先行研究の知見から理論研究の現状と今後の課題をあきらかにする。そのうえで、わが国の保育のカリキュラムの課題を整理し、本研究で提案するカリキュラムの方向性を検討する。

#### 【第3段階 遊びの分析とカリキュラム構築の検討】

環境と保育内容の連関の検証の中で、「自然発生的な遊び」の事例を収集し、これらの遊びの中で生成している学びの要素を記録する。

学びの要素を場面ごとに分類し、カリキュラム編成につながる要素を見出し、仮説としてのカリキュラムを編成する。

仮説に基づき、再度実践を検証する。

#### 【第4段階 研究のまとめ】

環境と保育内容の連関の分析の成果として、園舎を建設する。新しい環境と保育内容について、新たな課題を見出し検証する。

「自然発生的な遊び」が「深い学び」を生成するプロセスを代表的な事例を通して検証する。そのうえで記録として整理したものに意味分析を含め研究成果を公表する。

## 4. 研究成果

### 4-1 「自然発生的な遊び」から生成する「深い学び」の構築

自然発生的な遊びは、子どもの興味からスタートしていることから、子ども主体の保育を展開しやすい側面があるが、その際、保育者が遊びの展開の見通しを持つことが極めて重要な要素となる。見通しを持つためには、実践のナラティブの検証が欠かせない。また、より「深い学び」に至るには、子どもが出会う環境、教材研究が実践を変える要素となる。

この実践分析については、『「学び」が深まる実践へ 「火おこし」体験に見る5歳児の探究の世界』ななみ書房 2023 にて公刊した。

### 4-2 園舎を含む保育環境と保育内容との連関

保育は、「遊び」と「生活」を中心に行うことから、園舎を含む保育空間は、子どもの「遊び」と「生活」が豊かに展開できる要素を持たなければならない。これまでのわが国の保育環境は、多くが「小さな学校的環境」の傾向にあった。近年、保育施設の建築は、非学校的環境の可能性を探ろうとしており、実際にそうした成果物(園舎)も多く作られている。本研究では、徹底して非学校的環境、つまり、くらしの場としての保育環境を作り出し、そこで子ども主体の「遊び」と「生活」を保証することで、「学校的環境」以上に「深い学び」を実現することができることを検証した。この研究の成果は、完成した園舎と著書『育ちの場を創る』(2024年春公刊予定)として公表する。

### 4-3 保育者のナラティブの検証

本研究においては、子どもの「深い学び」に着目し、実践者の記録、語り、映像をデータとして、検証してきた。保育者のナラティブは、研究者と協同して分析することで、意味が見いだされ、保育者と子どもが学びあう存在になることで、さらに学びが深まるということが明らかとなった。保育者が教授し、子どもが教授されるという<保育者 子ども>関係ではなく、共同体を構成する者同士が互いに「対話しあう関係」であることが学びを支えており、さらに、この関係性の中で生まれる学びの物語が、保育の質を方向付けるものであることが明らかになった。(磯部裕子編著『「学び」が深まる実践へ 「火おこし」体験に見る5歳児の探究の世界』ななみ書房 2023 p.66)

### 4-4 質的研究の可能性および専門性の交差と越境

本研究は、質的研究の方法論によって進めたものである。近年、保育実践を対象とした質的研究の手法が様々に検証されているが、本研究では、4-3のナラティブの検証と共に、専門性の異なる3者(建築家、実践者、保育研究者)による、フィールドワークを重ねることで、質的研究の可能性を探った。保育という多様な営みが生成される場において、専門性の異なる者が協同し、専門性の越境体験することで、それぞれのナラティブの意味にある変容をもたらすことにもつながった。

### 4-5 ナラティブの整理と公表

本研究で整理した実践の記録は、『「学び」が深まる実践へ』として1巻に1事例をまとめ、シリーズとして公刊する。まとめた著書は、さらに新たな実践者と検証し、継続して研究していく。以下、公刊予定のシリーズである。

- ・磯部裕子編著 藤澤友香子 早川陽太郎著 『「学び」が深まる実践へ 火おこし体験にみる5歳児の探究の世界 - 』 ななみ書房 2023
- ・磯部裕子編著 大江文著 『「学び」が深まる実践へ 用水路にホタルを戻したい！5歳児のSDGsへの挑戦 - 』 ななみ書房 2023
- ・磯部裕子編著 藤澤友香子著 『「学び」が深まる実践へ 飛べない蚕の大きな仕事 いまこの命に向き合う5歳児の探究 』 ななみ書房 2023 (印刷中)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 磯部裕子	4. 巻 8
2. 論文標題 関わり合いの場(ノット)としての園づくり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子ども学	6. 最初と最後の頁 186-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 磯部 裕子、藤澤 友香子、早川 陽太郎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ななみ書房	5. 総ページ数 72
3. 書名 「学び」が深まる実践へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------